

## 表紙から

### 剣道を通じて 子どもたちを育てる

今月の表紙の人は、北栄地区にお住まいの安藤金五郎さん（七五）。剣道の道場を開いて、長年地域の子どもたちに剣道の楽しさを教えています。

安藤さんが、子どもたちに剣道を教えるようになったのは一九七二（昭和四十七）年から。最初は東区民センターで週一回東区の子どもたちに剣道を教えていたそうです。その後も各地区の小学校で、仕事が終わった後に指導を続けていましたが、退職した一九八六（昭和六十一）年に自宅を改築し、一階に道場を造りました。

自宅の道場で子どもたちに剣道の指導をする安藤さん(左)



現在は、木曜と日曜を除く毎日この自宅道場で、幼稚園児から中学生までの子どもたち約三十人を教えています。剣道が好きになっ

てくると、風邪をひいていても道場にやって来る子がいて、家に帰すのに苦労することもあるそうです。「幼い子どもにも教えていますが、特に小さいころは、技術よりも基本が大切。それから、あいさつがしっかりできる礼儀正しさも身に付けてほしいですね」と安藤さん。道場に通う子どもたちはいつも大きな声であいさつを交わっています。

安藤さんの大きな喜びは、成長した教え子が、道場の鏡開きのときなどに訪ねてきてくれたり、ほかの地域で指導者として活躍してくれたりすること。「子どもたちが、剣道を通じて心身ともに成長していく過程を見続けられることが、本当に楽しいですね」と笑顔で話してくれました。

「健康に気を付けて、体が続く限り、子どもたちと一緒に剣道を続けていきたい」と話す安藤さん。元気な掛け声が響く道場で、子どもたちを温かいまなざしで見守り続けます。

## ひがく すとりー

ウインターキャラメルを製造

キャラメルは菓子類の中でも特に機械化による大量生産をしやすい製品であるといわれています。その一方、キャラメルの硬さは湿度の具合に影響されるので、口に入れたときに程よく溶けるような生産技術も求められます。

古谷製菓は一九三二（昭和六年）に「ウインターキャラメル」の製造を始めます。食べ口をよくした軟らかいキャラメルは「夏は溶けやすいものの、冬なら長持ちするだろう」と考えた新製品。その名の通り、十一月に売り出し、二月に売り止めて、三月いっぱいまで売切る冬季限定の販売でした。スキーやスケートのときに、手袋をはめたままでもつまんで口へ運べるよう、オブラートに包む工夫もしました。「牛乳とバターをたっぷり使った、北海道らしいキヤンデーを生産したい」というアイデアと研究の成果です。



○古谷辰四郎商店(南1西1)  
『故古谷辰四郎尋思録』から

第12回

### 東区工業小史 菓子工業(三)

発売後すぐに大評判を呼び、古谷製菓の名を高めました。

全国への展開を目指す

第二次世界大戦中、古谷製菓は軍の管理工場になります。キャラメル、ようかん、甘納豆、ビスケット、乾パンを軍に納めました。

戦後は全国への展開を目指します。一九五二（昭和二十七年）年、埼玉に工場を建設。以後も高度成長の波に乗って各地に支店を設けました。一九五八（昭和三十三年）年の記録によると、キャラメルだけでも年産三億九千万円に上り、その四割は東北・東海・北陸・関西・九州へ出荷されたそうです。

道内菓子工業のトップだった古谷製菓は一九八四（昭和五十九）年に経営破たんに見舞われました。キャラメルに続くヒット商品に恵まれなかったこと、消費者の好みの変化に対応できなかったことなどが原因であるといわれています。現在、古谷製菓を継承する会社によって、「フルヤのミルクキャラメル」が再現されています。